

弓道部に入部

1961(昭和36)年、立命館大学経営学部第1期生として入学した。人見知りし、気が弱く、引つ込み思案の性格だった私は、「こんなことでは社会に出ても通用しない」と自己分析していた。現在の豪快な私を知る者はこのことを信じない。しかし、昔の私を知る旧友からは「澄ちゃん、ずいぶん変わったな」とよく言われる。

大学を卒業するまでに、自分の性格を変えたいと思っていたが、それにはやはり運動部に入る方がよいと考えた。中学、高校ではバスケットボール部で活動したが、大学の運動クラブでは技術と体格の双方がそろっていないと無理。それで体格がハンディにならないクラブを探すことにした。スキー、

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 8

山岳、乗馬、フェンシング、重量挙げなどかなと考えながら、校舎の近くにある京都御所を歩いていた。人が出てきた。

すると「エイイー」「当たり前」などと袴を身に着けた2人の姿は本場に格好良かった。目が合うといきなり「1こえてきた。自然にそちらに向けて歩

御所という伝統のある環境で、胴着 再生か？」と聞いてきた。実は立命館大

よろい
鎧を通すほどの矢

学の弓道部員だったのだ。

彼らは、「興味があるなら見ていけよ」と優しく言うてくれたが、それは私を勧誘する目的だったのだ。昔、吹き矢や手裏剣で遊んだ私は、狙いを定めるのと腕力に自信があったので、その場で入部した。

が一緒に、青春を語り合った仲間であった。下宿に帰ると私はいとこに宣言した。「弓道部に入部したが、必ず主将になつて活躍する」と。リーダーになるためには下級生の時に、いかに上級生に認められなければならないかを知っていた。主将になるには技量はもちろん、明るく、時には思いやりを持ちつつ、強力にリードできる手腕などを身に付けなければならない。

弓道部では2回生の初戦から4回生の秋まで全ての公式試合で活躍し、4回生の時の昇段試験では四段を取得した。八段の三原師範代から「伊藤の強い矢であれば鎧を突き抜けるな」とお褒めの言葉をいただいたが、私にとつては社会に出て何とかやれるという手ごたえを得たことの方がはるかに有意義だった。

マイ
my way
ウェイ



立命館大弓道部時代の私(京都御所)